

## 『金光明経』「空性品」の研究

文学研究科仏教学専攻博士後期課程3年

ウ  
ル  
ジ  
ー  
ジ  
ャ  
ル  
ガ  
ル  
烏力吉吉日嘎拉

## 1. 問題の所在

空 (sūnya) とは実体がなく、からっぽなことを指す。空性 (sūnyatā) とは「空」に、性質 (bhāva) を表示する taddhita 接辞 taL (Pāṇini 5.1.119: tasya bhāvaḥ tvatalau) が導入されて派生する抽象名詞で、「空の性質」を意味する。空性は、『雑阿含経』(Saṃyuttanikāya) や『法句経』(Dhammapada) などの初期仏典では無我説や禪定などに関連づけて説かれ<sup>1</sup>、『二万五千頌般若経』(Pañcaviṃśatisāhasrikāprajñāpāramitā) や龍樹 (Nāgārjuna) の『中論』(Madhyamakakārikā) などの大乘仏典論書では、般若波羅蜜や縁起説などと関連づけて説かれる<sup>2</sup>。

『金光明経』(Suv) で「空性」を説く「空性品」(sūnyatāparivarta) は、33の偈頌から成る<sup>3</sup>。「空性品」を、大乘仏典で説かれる空の分類体系によって分類し、註釈したのは、唐代の慧沼の義浄訳『金光明最勝王経』に対する註釈書である『金光明最勝王経疏』(慧沼疏) である。彼によれば「空性品」では (1) 内 (adhyātma)、(2) 外 (bahirdhā)、(3) 内外 (adhyātma bahirdhā)、(4) 畢竟 (atyanta)、(5) 無際 (anavarāgra)、(6) 無散 (anavakāra)、(7) 性 (prakṛti)、(8) 一切法 (sarvadharmā) という8種の空が説かれているという<sup>4</sup>。

壬生 [1987] は、『金光明最勝王経』に対する翻訳で「空性品」の内容を説明するにあたり、慧沼疏と同じく、空を8種の空に分類している。古坂 [2003] は、慧沼疏の問題点を「解釈に『十八空論』を直接的に適用した仕方は問題を孕んでいる」と指摘しながら、和訳は漢訳に大部分で依拠している。また解釈についても慧沼の見解を踏襲している部分が多く見られる。

しかし『中阿含経』(Majjhimanikāya) の「大空性経」(Mahāsuññatasutta) を起源とする内空、外空、内外空の三空を除けば、Suvの空性説に慧沼疏に基づく8種の空にあてる分類は、必ずしも妥当ではない<sup>5</sup>。従ってSuv「空性品」の構造を再検討することが必要であるように思われる。

また空性説の説明においてSuv「空性品」には、身体を「人気のない村」(sūnyagrāma)

に、四大元素を四匹の「毒蛇」(āśiṣa) に例える表現など初期仏典で説かれる表現と共通する特徴が数多く見られる。それが初期仏典からの直接の影響か、或いは特定の大乗仏典論書を通して受け入れられたかという問題は、未だ解決されていない。また「智という剣」(jñānāsi) や「一瞬の間に起こった智」(ekakṣaṇapravṛttam tu yaj jñānam) など、般若經典類で説かれる智慧 (prajñā) に関する表現が見られることも、先行研究では指摘されていない。

以上の点を踏まえ、本章では慧沼疏が説く8種の空の分類体系に従う先行研究とは異なる観点から以下の2点の解明を試みる<sup>6</sup>。

- (1) 阿含經典類と「空性品」との関係
- (2) 大乗仏典論書類と「空性品」との関係

## 2. 「空性品」の構成

### 2.1. 「空性品」序論—第1-3偈

Suv「空性品」第1-3偈に当たる序論は、「空性」について説く趣旨を挙げる箇所である。同箇所は、「經典のうちで最も勝れた最高のもの」、「經典の王であり、最も勝れた最高のもの」、「最も勝れた王のようなこの經典」という本經の形容句を述べ、「空性」を説く理由を説明する。

他の考えられない[程多くの]經典の中では、空に関する法は非常に詳細に示されている。したがって、經典のうちで最も勝れた最高のもの(Suv)によって、これら空に関する法を要約して示そう。(1)

智慧が乏しく無知な衆生達は、実にすべての法を知ることができない。したがって、ここにこの經典の王であり、最も勝れた最高のもの(=最勝王經、Suv)によって、空に関する法を要約して示そう。(2)

また、その他諸々の方便や道理や理由を用いて、衆生達に大悲の力を生起させるために、実に、すべての衆生達が理解するように、この最も勝れた王のようなこの經典(Suv)が説かれるのだ。(3)<sup>7</sup>

「空に関する教え」については、多くの經典の中では詳細に説かれるが、Suvはそれを略説することを強調する。この趣旨を示す文(第1-3偈)には、世尊に相對して教えを告げられる対告者が現れないという特徴があることを壬生[1987: 178]は指摘している。壬生はこの理由を明らかにしていない。しかしSuvの構成上の流れを考えると「空性品」の前章「蓮華喩讚品」(Kamalākaraparivarta)は、世尊が菩提樹神(Bodhisattvasamuccayāṃ Kula-devatā)という女神に教えを説くことから始まる。「空性品」はそれに続いて説かれている

から、対告者が登場しない形式が採られていると推測できる。また以下に見る「空性品」の第16偈には、「女神よ、汝はこれら諸法を見よ (paśyāhi tvam devata eta dharmān)」という箇所があり、この「女神」(devatā)は前章のBodhisattvasamuccayāṃ Kuladevatāのことを指していると考えられるから、対告衆が現れないことにも合点が行く。

## 2.2. 「空性品」本論一第4-10偈

人間を物質的要素、或いは精神的要素の観点からみて五つの構成要素に分類したのが、五蘊である。十二処、十八界は五蘊を認識論の立場から分類したものである<sup>8</sup>。Suvでは、まず人間の六つの感覚器官である六根を提示し、次にその六根の対象となる六境を示し、最後に六根と六境を縁 (pratyaya) として生じる識 (vijñāna) について論じている。では以下に、六根、六境、六識をSuvはどのように説明しているかを詳細に見てみよう。

### 2.2.1. 六根一第4偈

六根 (六内処) とは、視覚、聴覚、嗅覚、味覚、触覚という五種の感覚器官に心作用 (manas) を加えたものであり、衆生のもつすべての感覚器官を指す。初期仏典、アビダルマ論書、大乘仏典論書における空の分類体系では、この六根を「内空」に分類する<sup>9</sup>。Suvでは、身体を人気のない村、六根を六盗賊に譬え、次のように説明する。

そして、この身体は人気のない村のように存在している。6つの感官 (根) は村に巣くう盗賊のようなものである。彼等は皆、同一の村に住んでいる。[しかし] 彼等は互いを知らない。(4)<sup>10</sup>

『十地經』(*Daśabhūmika*) においては、「六根」が働く場所としての「空村」(śūnyagrāma) の用例が見られる<sup>11</sup>。初期仏典には、「空性の住まい (suññatāvihāra)」、「空宅 (suññagāra)」または「空舎 (suññageha)」といった「空」に関する記述が多数存在する。例えば『中阿含經』の「小空性經」(*Cūlasuññatasutta*) には、「アーナンダよ、私は今、空性の住まいによって、何度も住んでいます」とある<sup>12</sup>。『中阿含經』の用例について藤田 [1982: 433] は「空に関する教説が多く禪定と結合した形で説かれていることによって知られるが、それについてはまず注目されるのは、禪定を修習する場として「空屋」に住むことがしばしば説かれていることである」と指摘している。

Suvは、初期仏典などに説かれる修行の場としての「空屋」を修行者そのものとし、そこに巣くう六盗賊を六根に譬えている。それと対照的に『雜阿含經』では、人気のない村を六根、六盗賊を六境に譬えている<sup>13</sup>。当該箇所は、Suvと比喩するものとされるものに違いこそあれ、六根と六盗賊の比喩を用いる点では共通性を持っていることがわかる。さらに『大

智度論』(Mahāprajñāpāramitāsāstra)は、『雑阿含経』のそれを「波羅蜜」(pāramitā)の意味を説明する時に引用している<sup>14</sup>。

また、身体を人気のない村で譬えている箇所は、『維摩経』(Vimalakīrtinirdeśa)に「この身体は空村にも似て」という身体を「空村」と比喩する表現と、「六内処を空村と判断する喜び」という六根を「空村」と比喩する表現がある<sup>15</sup>。従ってSuvは、初期仏典や大乘仏典に見られる表現を踏襲していることがわかる。

### 2.2.2. 六境—第5-6偈

六境(六外処)とは、五種の感覚器官(五根)の対象となる色、声、香、味、触と意の対象となる法を指す。この六境は、「内空」の対象として「外空」であると初期仏典などの伝統的な空の分類体系で説かれる。Suvは、六根の感覚と心作用の対象としての六境を提示している。

眼根は色に向かって行き、耳根は声という考察対象に[向かって行く]。鼻根は香という様々なものを奪い、舌根は常に味に向かって行く。(5)

身根は触にあるものへ向かって行き、意根は法という考察対象に[向かって行く]。以上のように、六根は互いに各々の対象(六境)に向かって歩いて行く。(6)<sup>16</sup>

第5-6偈で表すような六根と六境の対応関係を示す箇所は、『雑阿含経』の中に殆ど同一の表現が見られる<sup>17</sup>。当該箇所は、Suvの内容から見て、その影響を受けたことが推測され得る。

### 2.2.3. 六識—第7-10偈

六種の感覚器官である六根とその六根の対象となる六境とを合わせて十二処という。初期仏典などの伝統的な空の分類体系では十二処は、「内外空」として扱われる。その十二処を縁とし生じた心の識別を六識という。Suvは、これを識(vijñāna、[分別や判断などの]認識作用)ではなく、認識作用を行う認識主体としてのcitta(心)という語を用いて表している。

実に、心(=識)は幻のように気まぐれであり、六根は、[それぞれの]対象(境)という考察対象を持つものである。ちょうど人が人気のない村に向かって行き、六人の盗賊と一緒に[村に]身を寄せている(7)

そのような形で心(=識)は、六境に依拠し、感官(六根)の働く領域を見出している。すなわち、色と声と香と味と触、ならびに法という領域である。(8)

そして心（＝識）は、六根全体の中で鳥のように飛び回り、感官の中に入り込み、凡そどこであれ、感官が依拠するところ、それに対して、感官は認識を自身に属するものとなす。(9)

また身体は、静止して活動せず、本質がなく、縁によって生じたものである。虚妄分別（非実在の構想）より生じ、動かなくなった機械のようであり、人気のない村のようである。(10)<sup>18</sup>

Suvは、認識主体としてのcitta（心＝識）を幻に譬え、六根と六境との相互関係を示している。『中辺分別論』（*madhyantavibhāgaśāstya*）は、「虚妄分別」（*abhūtaparikalpa*）を中心に唯識思想と空思想を解説し、「三自性説」（*trisvabhāva*）によって初期仏教以来のすべての教理を包摂し、瑜伽行（*yogācāra*）の具体的な修行法を提示している<sup>19</sup>。Suvも空性の説明にあたり「虚妄分別」という語を採用している点で『中辺分別論』と共通している。この表現は、慧沼がSuvの「空性説」の説明に『弁中辺論』を引用している一つの根拠ではないかと推測できる。

第4-9偈までは、六根、六境、六識の相互関係を説明し、第10偈はそれを認識論に基づいてまとめている。従って第4-10偈にあたる箇所は、十二処、十八界にまとめられる一切法からなる身体（＝我）について説明している<sup>20</sup>。また当該箇所は、「その身体（＝我）が本質ない」という「無我説」の立場に基づき、「空性」を説明していると考えられる。

## 2.3. 「空性品」本論—第11-17偈

### 2.3.1. 四大元素—第11-17偈

「空性品」第11-17偈では、万物を作りあげる物質的要素である地（*kṣiti*）、水（*salila*）、火（*tejas*）、風（*anila*）の四大元素について説いている。そこでは、四大元素を四匹の毒蛇に譬え、それぞれの性質を説明している。肉体としての身体を作る地、水、火、風の物質的な四大元素は、別々の性質を持ち、互いに対立しているという。

地、火、水、風とは村の中に住み、至るところに留まっている。実に、1つの籠に入れられた毒蛇のように、互いに常に敵対している。(11)

それら蛇のような要素は4種あり、2つは昇り、2つは下降している。それら蛇のような要素はすべて2つずつ身体の各処にあり、消滅する。(12)

そして、これら地という蛇と水という蛇とは下降して、滅する。これら火という蛇と風の気流という蛇である2匹は上昇する。(13)<sup>21</sup>

四大元素を毒蛇に比喻している記述は『雑阿含經』の中に見られる<sup>22</sup>。説一切有部は、す

べての物質を形成する依り処として四大元素を説く<sup>23</sup>。Suvが四つの元素が身体を依り処としていると説いている点は、説一切有部の説と共通している。また、『維摩経』や『十地経』の中でも四大元素を四匹の毒蛇に比喩している箇所がある<sup>24</sup>。しかし、その四大元素の性質に関する説明をしている点はSuvに特有である。さらに『大智度論』は、六根、六境の譬えと同じく『雑阿含経』の四匹の毒蛇を四大元素と比喩する箇所を引用している<sup>25</sup>。

[身体は] 心と識に依存し、前世に行われた業に従って天、人間、また三悪道に赴いて、業がなされた通りに、[身体は] 輪廻生存の中に起こる。(14)

粘液素、体風素、胆汁素は消滅という結末に到達する。[その時、] 身体は死んで、糞尿汚物に満ち溢れ、見るも気持ち悪くて、蛆虫の集まりに等しいものとなって、木片のようなもののように、火葬場に投げ捨てられる。(15)

女神よ、汝はこれら諸法を見よ。この世にどれだけの衆生や個人がいようと、これらの一切法は実に空であり、無知なるが故に、縁によって生ずるものである。(16)

これら元素は偉大であり、生起することがない。生じていない[元素]は生じていて、生起しないのである。実に、生じているものは生起しない故に元素と私が名づけた。(17)<sup>26</sup>

慧沼疏は、第16偈の前半が「畢竟空」、偈の後半から第20偈までが「無際空」を説明する内容であると解釈する。壬生[1987]は、第16偈が「畢竟空」、第17偈が「無際空」の説明であると述べる。しかし両者がどのような根拠からそのような分類をしているかは不明である。

第17偈で説かれる理論は、『金剛般若経』(Vajracchedikā)に説かれる「即非の論理」(AはAではない。だからAである)、つまり物事を否定することを通してその物事を肯定するという説明の形を取っている点で共通性を持っている<sup>27</sup>。

この第11-17偈で身体(=一切法)は空であり、縁によって生ずるものであり、それを造る物質的要素である地、水、火、風は非存在であると強調している。また身体は「縁によって生ずるものであり、物質的には非存在である」という「無常説」の立場に基づき、「空性」を説明していると考えられる。

## 2.4. 「空性品」本論—第18-20偈

### 2.4.1. 十二縁起—第18-20偈

初期仏教以来の基本的教義である十二縁起は、「無明」(avidyā)という根本原因によって「苦しみ」(duḥkha)が生じ、それによってすべてが形成されるということを十二種の因果

関係によって示したものである。これについてSuvは以下のように述べる。

無知なるが故に、如何なる時も [生起しないことを] 知ることが決してない。そして、無知なるが故に縁によって生ずるものである。そして、このように [生起しないことが] 知られないというのは無知によるからである。それ故、これを私は無明という。(18)

[縁起とは] 行、識、名色、六処、触、全く同様に受、愛、取、同様に有と生と老死、憂いである。諸々の苦悩と関係する。輪廻における諸々の苦しみは考えられない [ほど多い]。ちょうど輪廻転生の輪の中にあるように、生じていない [苦しみは] 生じていて、生起しないのである。それを生み出す母胎もなく、心で思案されるものである。(19-20)<sup>28</sup>

Suvでいう「無明」は、「縁」(pratyaya)によって生じたものである。また生活活動、精神活動、精神的存在と物質的存在、六種の感官の依り所、感官の接触、感受、愛、執着、存在、生まれること、老、死などの苦しみが無明という原因によって生じる。第19-20偈で説かれるのは、上記の「即非の論理」で「存在するものは生起しない」(非存在)ことを強調している。以上の第18-20偈に説かれるのは、「苦」の原因による十二縁起説である。

## 2.5. 「空性品」本論一第21偈

### 2.5.1. 五蘊一第21偈

五蘊とは、人間を物質的要素である「色」、精神的要素である「受、想、行、識」の五つにわけたものである。「空性品」では五蘊を次のように説く。

自身に関する誤った考えを断ち切れ。智という剣で煩惱という網を断ち切れ。  
[五] 蘊という住まいは空に等しいものと見よ。実にかの勝れた菩提という性質に触れよ。(21)<sup>29</sup>

第21偈で説かれる内容は、慧沼疏と壬生 [1987] の分類では「無散空」に相当する。しかし両者がこれを「無散空」の説明であると見做す根拠は不明である。

人間を構成する五つの要素である五蘊についてSuvは、「蘊という住まいは空に等しいものと見よ (skandhālayaṃ paśyatha śūnyabhūtaṃ)」と説いている。当該箇所は、『スッタニパータ』(Suttanipāta) の第五章 (Pārāyanavagga) に説かれる「モーガラージャンよ、常に想いをこらし、自我に執着する見解を打ち破って、世間を空として観察せよ」<sup>30</sup>という表現と非常に類似している。

この第21偈は、第4偈から説いてきた六根、六境、六識、四大元素、十二縁起の認識論上の身体の要素を物質的、精神的な構成要素である五蘊に結びつけ、その「五蘊を空に等しいもの」と見るべきであると述べている。また当該箇所は、「五つの構成要素（五蘊）があり、そして、それらはもともと空である」という意味合いで読み取ることもできる<sup>31</sup>。

第4-21偈は、六根、六境、六識からなる十八界、十二縁起、四大元素、五蘊の外的構成要素を通して空を理解する智慧について説いていると推測できる。そのことは第21偈にある「智という剣で煩惱という網を断ち切れ」（jñānāsinā chindatha kleśajālam）という智慧の表現から裏付けられよう<sup>32</sup>。

## 2.6. 「空性品」結論—第22-33偈

### 2.6.1. 不死=涅槃—第22-25偈

不死（amṛta）は、ヴェーダ期以来、諸文献の中に現れる語であり、初期仏教でもこの語が多く用いられ、度々涅槃（nirvāṇa）と結びつけられている<sup>33</sup>。Suvは「不死」という語を使って涅槃を表している<sup>34</sup>。第22-25偈は、「勝れた菩提という性質（第21偈cd句）」が「不死」に他ならず、それは同時に「涅槃」であることが説かれる。

そして、私は甘露（=不死）という城の門を開いた。甘露（=不死）の液を受ける、かの器を完全に示した。私は甘露（=不死）という城の清浄な家に入るだろう。私は甘露（=不死）の液で自己を満足させるだろう。(22)

私は勝れた法という太鼓を叩いた。私は勝れた法という法螺貝を吹き鳴らした。私は勝れた法という松明を灯した。私は勝れた法という雨を降らせた。(23)

私は最大の煩惱という敵に勝利した。私は実に、無上の勝れた法という旗を揚げた。私は衆生を生存の海から救い出した。私は悪道に通じる三つの道を閉ざした。(24)

衆生は煩惱という火に焙られ、依り処もなく、逃げ場もない。[私は] 煩惱が心を苦しめている衆生を安らかにさせ、冷たい甘露（=不死）の液で満足させた。(25)<sup>35</sup>

第22偈の内容を慧沼疏と壬生〔1987〕は「性空」の説明だと解釈する。しかし根拠を示していない。また壬生〔1987〕は第23-25偈、慧沼疏は第23-33偈を「一切法空」の説明と見做すが、何れもその根拠を明らかにしていない。

Suvは第22-25偈を「不死」という語を通して涅槃を表す。涅槃とは修行者が目指す最終的な目標である。Suvは「空性品」本論2.2-2.5までで説いてきた諸説の帰着点を涅槃と結びつけている。悟りの帰着点である涅槃というのは悟りの世界に至ったということである。そ



の涅槃に至る手段はどういうものであるかは、次の第26-33偈で説かれる。

### 2.6.2 智慧—第26-33偈

智慧（悟りの智慧）とは、初期仏教では修行者に悟りを導くものを意味し、智（jñāna）と同じ意味を持っていた。大乘仏教では、波羅蜜（pāramitā、彼岸に至った状態）に結びつけられ、悟りを生み出す知の働きとして重視された。以下でSuvの記述を確認する。

そのため、私はかつて数劫の間、実に考えられない程多くの仏に供養した。悟りの知を求め、堅く誓いを立てて修行し、正しい法の身体（=涅槃）を探し求めた。(26)

両手と両足と財宝、銀、宝石、真珠、装飾品、眼、頭、愛する息子や娘、黄金、瑠璃、様々な宝石を [捨てた]。(27)

三千世界におけるすべての草とすべての木と森と大地から生ずるすべてのものを切り、粉碎し、(28)<sup>36</sup>

そして、そのすべてを砕き、微細なる塵のようになすであろう。実に、虚空領域に達するまで砕かれたものの山を作ってから、(29)

大地の塵を3つに分けることができるように、数えきれない三千世界のすべての塵を3つ分けることもできよう。(30)

すべての衆生の智慧が一人の衆生に集められるとすれば、その智慧によって諸々の塵の粉を数えられるであろうが、(31)<sup>37</sup>

すべての衆生を超えていて、一層優れた智を持つ人々ですら、勝者のすべての智慧を数えることはできない。(32)

そして、偉大な聖者が抱く一瞬の間に起こった智は、数千劫において如何なるところでも、数えることはできない。(33)<sup>38</sup>

第26-27偈では、「正しい法の身体」（=涅槃）を探し求め、そこに到達できる手段として「智慧」が必要だったことが述べられる。第28-33偈は、その涅槃に到達できる智慧とはどういうものかを説明している。「空性品」のSkt.ではjñānaを「智慧」と「智」の両方の意味を含ませて説かれている。一方、Tib<sub>2</sub>ではཤེས་པ་ (prajñā、智慧) とཡི་ཤེས་ (jñāna、智) に訳し分けている。何れにしてもここで説かれる智慧は、修行者を悟りに到達させる智慧を説いている。そのことは世友 (Vasumitra) の『異部宗輪論』(Sumayabhedoparacanacakra) や『二万五千頌般若経』などに説かれる、「一刹那」(ekakṣaṇa) や「一心刹那」(ekacittakṣaṇa) に悟ることができる智慧の説と同様の「一瞬の間に起こった智」(ekakṣaṇaprapṛttam tu yaj jñānam) についてSuvが説いていることから判断できる<sup>39</sup>。

### 3. まとめ

Suv「空性品」の構造を内容上(1)序論、(2)本論、(3)結論の三つに区分して考察した。その構造を図示すると以下の通りである。

偈頌	筆者による三分	説かれる内容				
第1-3偈	「空性品」序論	空性を説く理由				
第4-10偈	「空性品」本論	六根／六境／六識	無我	空に関する法 (sūnyadharmā) = 一切法	空	空を理解するための智慧
第11-17偈		四大元素	無常			
第18-20偈		十二縁起	苦			
第21偈		五蘊	空			
第22-25偈	「空性品」結論	甘露(amṛta) = 不死 = 涅槃(nirvāṇa)				
第26-33偈		智慧(prajñā)		空を理解するための智慧 = 涅槃に至るための智慧		

以上「空性品」の内容を慧沼疏が説く8種の空の分類体系に従う先行研究とは異なる観点から考察した。そこから導かれる結論は次の通りである。

(1)「空性品」は十八界に「無我説」、四大元素に「無常説」、十二縁起に「苦」を結び付けて説いている。阿含經典類に体系化された「無我・無常・苦」からなる一切法に基づいて「空」とは何かを解釈し、五蘊からなる一切法もまた「空」とであると説いている。

(2)「空性品」は、『金剛般若經』で説かれる「即非の論理」、『中辺分別論』で説かれる「虚妄分別」という大乘仏典論書が空性思想を説明する時に用いる理論や表現を取り入れている。また十八界、十二縁起、四大元素、五蘊という外的構成要素を通して、空を理解する智慧について説いている。そのことは般若經典類で説かれる智慧に関する表現(第21偈、第33偈)が出されることから読み取れる。その空性を理解する智慧こそが、悟りの目的である「涅槃」に至るための智慧である。

#### 【注】

<sup>1</sup> 初期仏典において「無我」と「空」との関係性を説明している用例は、『雜阿含經』(T. No. 99: 2, 56b23-29)と、それに対応する*Samyuttanikāya* IX, 54.2-16に見られる。これらに基づく現代語訳は藤田 [1982: 417-418] を参照せよ。当該箇所を藤田 [1982: 418] は「無我説の立場に立って、六根等によって示される世間は空であると説かれる」と解釈する。また羽矢 [1992: 13] は「空によって無我を解説している文章としてよく紹介される」ものであると指摘する。

<sup>2</sup> 「般若波羅蜜」と「空」の関係性についての用例として*Pañcaviṃśatisāhasrikāprajñāpāramitā* IV. 72.30&73.7-8に見られる。これに基づく現代語訳は渡辺 [2013b: 136] を参照せよ。また「縁起」と「空」の関係性を説明したものは*Madhyamakakārikā* 24.18-19に見られる。これに基づく現代語訳は斎藤 [1998: 34] を参照せよ。本章では*Madhyamakakārikā*における用例をあげたが、「空」と「縁起」の関係性は初期仏典でも見られるようである。藤田 [1982: 424-428] は「現在の原始經典を検討してみると、空と縁起とのかわりを示唆する教説が幾つか見出

- される」と *Samyuttanikāya* とそれに対応する『雑阿含經』の用例をあげている。
- <sup>3</sup> 「空性品」の構造についてはウルジーガル [2014a] を見よ。
- <sup>4</sup> 慧沼とは唐代の法相宗の僧侶である。そのため彼は、瑜伽行唯識文献の『十八空論』(T. No. 1616, 31) や『弁中辺論』(T. No. 1600, 31) に基づき、Suv 「空性品」を解釈する。『十八空論』、『弁中辺論』は、空をそれぞれ18種、16種に分類している。『弁中辺論』の16種の空(466a03-6)は、『十八空論』の18種の空(861a20-25)に内包されるものである。
- <sup>5</sup> 三空の用例は、『中阿含經』(T. No. 26, 1: 738c2-c18) と、それに対応するに *Majjhimanikāya* III, 112.14-30に見られる。これらに基づく現代語訳は片山 [2001: 358-359] を参照せよ。
- <sup>6</sup> 本論で扱うテキストの訳注についてはウルジーガル [2014b] を見よ。筆者が扱う「空性品」はSuvのサンスクリットテキスト、漢訳、チベット語訳、モンゴル語訳の全ての伝本に存するが、それらの間には偈頌数に相違がある。しかし、内容上大きな相違は見られない。
- <sup>7</sup> Suv 5.1-3: anyeṣu sūtreṣu acintiyēṣu ativistaraṃ deśita sūnyadharmāḥ | tasmād ime sūtravarottamena saṃkṣepato deśita sūnyadharmāḥ || 1 || sattvo 'lpabuddhir avijānamāno na śakya jñātuṃ khalu sarvadharmāḥ | tasmeha sūtrendravarottamena saṃkṣepato deśita sūnyadharmāḥ || 2 || anyair upāyair nayahetubhiś ca sattvāna kāruṇyavaśodayārtham | prakāśitaṃ sūtravarendram etad yathābhijānanti hi sarvasattvāḥ || 3 ||
- <sup>8</sup> 「五蘊」、「十二処」、「十八界」についての詳細な説明は渡辺 [2009a: 171] を参照せよ。
- <sup>9</sup> 『大毘婆沙論』(T. No. 1545, 27: 37a13-15) には十種の空が説かれ、『大般若波羅蜜多經』(T. No. 220, 5-7: 13b22-26) には十八種の空や二十種の空が複数説かれる。
- <sup>10</sup> Suv 5.4: ayaṃ ca kāyo yatha sūnyagrāmaḥ ṣaḍ grāmacauropama indriyāṇi | tāny ekagrāme nivasanti sarve na te vijānanti paraspareṇa || 4 ||
- <sup>11</sup> sūnyagrāmaの用例は『十地經』(T. No. 287, 10: 544a3-6) と、それに対応する *Daśabhūmika* 18.5-7に見られる。これらに基づく現代語訳は荒牧 [1974: 89] を参照せよ。
- <sup>12</sup> 訳は片山 [2001: 347] を採用した。それに対応する原典については『中阿含經』(737a4-5) と、*Majjhimanikāya* III, 104.13-14を参照せよ。
- <sup>13</sup> 『雑阿含經』(313b22-c18) と、それと対応する *Samyuttanikāya* IV, 173.21-175.10に見られる。これらに基づく現代語訳は立花 [1940: 273-275] を参照せよ。
- <sup>14</sup> 『大智度論』(T. No. 1509, 25: 145b15-23) に見られる。これに基づく現代語訳はLamotte [1966-1980: II. 707]、梶山・赤松 [1989: 160-161] を参照せよ。
- <sup>15</sup> 『維摩經』(T. No. 475, 14: 539b28; 543b2-3) と、それと対応する *Vimalakīrtinirdeśa* 18.19-20; 40.7に見られる。これらに基づく現代語訳は高橋・西野 [2011: 36; 77] を参照せよ。
- <sup>16</sup> Suv 5.5-6: cakṣvīndriyaṃ rūpagateṣu dhāvati śrotrendriyaṃ śabdavicāraṇeṣu | ghrāṇendriyaṃ gandhavicitrahāri jihvendriyaṃ nitya raseṣu dhāvati || 5 || kāyendriyaṃ sparśagateṣu dhāvati manendriyaṃ dharmavicāraṇeṣu | ṣaḍindriyāṇīti paraspareṇa

svakasvakaṃ viṣayam abhikramanti || 6 ||

<sup>17</sup> 『雑阿含経』(313a14-b13) と、それに対応する *Samyuttanikāya* IV, 198.13-25に見られる。これらに基づく現代語訳は立花 [1940: 273-275] を参照せよ。

<sup>18</sup> Suv 5.7-10: cittam hi māyopama cañcalaṃ ca ṣaḍindriyaṃ viṣayavicāraṇaṃ ca | yathā naro dhāvati śūnyagrāme ṣaḍgrāmacaurebhi samāśritaś ca || 7 || cittam tathā ṣaḍviṣayāśritaṃ ca prajānate indriyagocaraṃ ca | rūpaṃ ca śabdaṃ ca tathaiva gandhaṃ rasaṃ ca sparsaṃ tatha dharmagocaram || 8 || cittam ca sarvatra ṣaḍindriyeṣu śakunir iva cañcalaṃ indriyasampraviṣṭam | yatra yatrendriya samśritaṃ ca tatrendriyaṃ kurvatu jānam ātmakam || 9 || kāyaś ca niśceṣṭa nirvyāpāraś ca asārakaḥ pratyayasambhavaś ca | abhūtaparikalpasamutthitaś ca sthitakarmayantram iva śūnyagrāmaḥ || 10 ||

<sup>19</sup> 詳細は桂 [2012: 12-13] を参照せよ。abhūtaparikalpaについて説く箇所は *Madhyāntavibhāgaśāstra* 1.2と、これに基づく現代語訳は長尾 [1976: 232] を参照せよ。

<sup>20</sup> 森 [2001: 69] は「原始聖典には、このほかに「十二処」とか「十八界」という分類方法も見出されるが、これらも衆生あるいは人間を別の視点から分析したまでのことで、これらも「一切法」の同義語である」と指摘する。

<sup>21</sup> Suv 5.11-13: kṣitiś ca tejo salilānilāś ca grāmāntarasthā sthita deśe deśe | paraspareṇaiva sadā viruddhā yathaiva āśīviṣa ekaveśmani || 11 || dhātūragāś te ca caturvidhāni dve ūrdhvaḡāmī dvaya heṣṭagāmī | dvayādvayaṃ diśavidiśāsu sarvā naśyanti te dhātubhujamgamāni || 12 || kṣityuragāś ca saliloragāś ca imau ca heṣṭā kṣayatām vrajete | tejoragāś cānilamārutoragā imau hi dve ūrdhvaḡatau ca bhonti || 13 ||

<sup>22</sup> 『雑阿含経』(313b22-c18) と、それに対応 *Samyuttanikāya* IV, 173.21-175.10に見られる。これらに基づく現代語訳は立花 [1940: 273-275] を参照せよ。

<sup>23</sup> 森 [2001: 143] は「説一切有部」は、物質はどんなものでも地・水・火・風という四つの元素から成り立っていると考える」と指摘する。

<sup>24</sup> 四元素を毒蛇に比喻している記述は『維摩経』(543b2) と、それに対応する *Vimalakīrtinirdeśa* 40.7に見られる。これらに基づく現代語訳は高橋・西野 [2011: 77] を参せよ。また『十地経』(544a3-6) と、それに対応する *Daśabhūmika* 18.5-7に見られる。これらに基づく現代語訳は荒牧 [1974: 89] を参せよ。

<sup>25</sup> 四大元素を四匹の毒蛇と比喻する箇所は『大智度論』(145b10-22)に見られる。その現代語訳はLamotte [1966-1980: II. 703-707]、梶山・赤松 [1989: 159-160] を参照せよ。

<sup>26</sup> Suv 5.14-17: cittam ca vijñāna samāśritaṃ ca gatvā yathā pūrvakṛtena karmānā | deve manuṣyeṣu ca triṣv apāye yathā kṛtaṃ karma bhava pravṛttam || 14 || śleṣmānilaṃ pitta kṣayāntaprāptaṃ kāya mṛto mūtrapuriṣapūrṇaḥ | nirabhiraṃyaḥ kṛmiskandhabhūtaḥ kṣiptaḥ śmaśāne yatha kāṣṭhabhūtaḥ || 15 || paśyāhi tvaṃ devata eta dharmān katir atra sattvas

tatha pudgalo vā | sūnyā hi ete khalu sarvadharmā avidyataḥ pratyayasambhavās ca || 16 ||  
ete mahābhūta [mahā asambhavāḥ] abhūta [sambhūta a]sambhavās ca | tasmān mahābhūta  
mayā prakīrtitā yasmāc ca bhūtā hi asambhavās ca || 17 || 解釈に問題が残る第17偈のTib.の  
原文は次の通りであり、mahābhūtaを「元素」の意味で解釈している。D114a5; D2204b7;  
N126b3; N<sub>2</sub>は欠く; S<sub>a1</sub>401b7-402a1; S<sub>a2</sub>78a6-7; S<sub>b1</sub>359a2; S<sub>b2</sub>248b3-4: འབྱུང་བ་ཆེན་པོ་འདི་དག་ཆེ་འབྱུང་ མིན།  
ལྷན་བྱུང་བ་ལས་བྱུང་ཞིང་མི་འབྱུང་སྟེ། གང་གི་ཕྱིར་ནི་འབྱུང་བ་མི་འབྱུང་བ། དེ་ཕྱིར་འབྱུང་བ་ཆེ་ཞེས་ངས་བཟོད་དོ། (これら元素 (mahābhūta) は  
偉大な非存在である。非存在から生じていて (abhūta-sambhūtaは奪格限定複合語で解釈さ  
れている)、非存在である。実に、生じているものは非存在である故に、元素 (mahābhūta)  
と私が名づけた。この箇所に対応するChi<sub>1</sub>とChi<sub>3</sub>は次の通りである。[Chi<sub>1</sub>424b25-26] : 「如是  
諸大。一一不實。本自不生。性無和合。以是因緣。我說諸大」。[Chi<sub>3</sub>340b13-14] : 「彼諸大種  
咸虛妄。本非實有體無生。故說大種性皆空。知此浮虛非實有」。Chi<sub>3</sub>からの重訳であるTib<sub>3</sub>と  
Uig.のそれぞれの現代語訳は以下の通りである。Nobel [1958: 170-171] : „Jene Elemente  
sind völlig unwahr; sie sind (daher) von Natur aus nicht reale Existenz, (und) ihre  
Wesenheit hat kein Entstehen. Darum lehre ich die Natur der Elemente als leer, und man  
soll (daher) wissen, dass sie substanzlos und leer und nicht von realer Existenz sind.“  
Radloff [1930: 201-202] : „Er und alle Elemente sind als Unwahrheit zu bezeichnen. Von  
Anfang an sind sie nicht wirklich vorhanden und ihre Grundlage ist nicht Wahrheit.  
Deshalb sage ich so: die Grundlage der Elemente ist Leerheit. Man muss wissen, dass sie  
Falschheit, Lüge und Unwahrheit ist.“ Nobel [1937] からの翻訳では岩本 [1975]、古坂  
[2003] がある。岩本 [1975: 161] : 「これら偉大な存在 (mahā-bhūta) はまこと非存在であ  
り、現実に生じたものではない。この世に存在するものはまこと非存在である故に、わたし  
は偉大な存在 (mahā-bhūta) という」。mahābhūtaを偉大な存在 (mahā-bhūta) と解釈して  
いる。古坂 [2003: 99] : 「これら大種 (物質的要素mahābhūta) は大いなる非実在物であり、  
無から生じつつ (本来は) 生じない。ものは生じない故に、それ故私により大いなる非実在  
物 (mahā-abhūta) と名づけられた」。一回目のmahābhūtaを「元素」の意味を取り、二回目  
のmahābhūtaを非実在物 (mahā-abhūta) と解釈している。これはChi<sub>3</sub>に従うものである。こ  
こではNobel [1958: 170-171] とTib<sub>2</sub>に従い、物質の構成要素である「元素」を取る。

<sup>27</sup> 『金剛般若經』における「即非の論理」を示す一用例をあげると次の通りである。「般若波羅  
蜜であると如来が説かれたもの、それこそが波羅蜜ではないと如来が説かれているからである。  
それ故に般若波羅蜜であると呼ばれるのである」(渡辺 [2013a: 47])。その原文は渡辺  
[2009c: 60.20-21] を参照し、それに対応する玄奘訳 (『大般若波羅蜜多經』 T. No. 220, 7:  
982a9-11) を参照せよ。

<sup>28</sup> Suv 5.18-20: avidyayā naiva kadāci vidyate avidyataḥ pratyayasambhavās ca |  
avidyamānaivam avidyayā ca tasmān mayā ukta avidya eṣā || 18 || saṃskāravijñāna





<sup>38</sup> Suv 5.32-33: sarvasattvāirekebhir jñānavatatarair naraiḥ | sarvaṃ gaṇayitūṃ śakyam na tu jñānaṃ jinasya ca || 32 || ekakṣaṇapravṛttam tu yaj jñānaṃ ca mahāmuneḥ | anekakalpakoṭīṣu na śakyam gaṇayitūṃ kvacit || 33 ||

<sup>39</sup> 「一刹那」や「一心刹那」の用例は『異部宗輪論』(T. No. 2031, 49: 15c4-6)やその異訳である『十八部論』(T. No. 2032, 49: 18b16-18)、『部執異論』(T. No. 2033, 49: 20c4-7)に確認でき、Tsukamoto [2004: 97-98]から現代語訳を確認できる。また*Pañcaviṃśatisāhasrikā-prajñāpāramitā* V. 153.17-23にも確認できる。その現代語訳は渡辺 [2009b: 127]を参照せよ。

### 【略号】

Chi: 曇無讖訳『金光明経』(T. No. 663, 16: 335a2-359b1).

Chi: 宝貴合『合部金光明経』(T. No. 664, 16: 359b4-402a22).

Chi: 義浄訳『金光明最勝王経』(T. No. 665, 16: 403a2-456c19).

D: *sDe dge bKa' 'gyur*, pha 1b1-62a7.

D: *sDe dge bKa' 'gyur*, pa 151b1-273a7.

Sa: *sTog pho brang bKa' 'gyur*, ci 385a4-473a5.

Sa: *sTog pho brang bKa' 'gyur*, ya 1b1-175a3.

Sb: *sTog pho brang bKa' 'gyur*, na 341b3-430a6.

Sb: *sTog pho brang bKa' 'gyur*, na 178b3-341b2.

Tib: Jinamitra, Śilendrabodhi and Ye shes sde trans. འཕགས་པ་གསེར་འོད་དམ་པ་མདྲོ་ལྷེ་འོད་ལང་པོའི་རྒྱལ་པོ་ཞེས་བྱ་བ་ཐེག་པ་ཆེན་པོའི་མདྲོ། (Tōhoku No. 556, pa 151b1-273a7; Ōtani No. 175, pa 157a4-283a6).

Tib: Chos grub tr. འཕགས་པ་གསེར་འོད་དམ་པ་མཚོག་ཏུ་རྣམ་པར་རྒྱལ་བའི་མདྲོ་ལྷེ་འོད་ལང་པོའི་ཐེག་པ་ཆེན་པོའི་མདྲོ། (Tōhoku No. 555, pa 19a1-151a7; Ōtani No. 174, pa 20a6-157a4).

N: *sNar thang bKa' 'gyur*, kha skong 11a1-94b7.

N: *sNar thang bKa' 'gyur*, na 208b7-385a4.

Uig.: see Radloff [1930].

慧沼疏:『金光明最勝王経疏』(T. No. 1788, 39: 175a2-341c20).

### 【一次資料】

*Daśabhūmikāsūtra*. Ed. P. L.Vaidya, Darbhanga: The Mithila Institute, 1967.

*Dhammapada*. Ed. O. von Hinüber & K.R. Norman, Oxford: The Pali Text Society, 1994.

*Nāgārjuna Mūlamadhyamakakārikāḥ*. Ed. J. W. de Jong, Madras: The Adyar Library and Research Centre, 1977.

*Madhyānta-Vibhāga-Śāstra*. Ed. Ramchandra Pandeya, Delhi: Motilal Banarsidass, 1971.



- The Majjhima-Nikāya*. Ed. Robert Chalmers, 3 vols., Oxford: The Pali Text Society, 1899.
- Pañcaviṃśatisāhasrikā Prajñāpāramitā*. Ed. Takayasu Kimura, 8 vols., Tokyo: Sankibo Busshorin Publishing Co.,Ltd., 1986-2009.
- Saṃyutta-Nikāya*. Ed. Léon Feer, 5 vols., Oxford: The Pali Text Society, 1884-1898.
- Sutta-Nīpāta*. Ed. Dines Andersen & Helmer Smith, London: The Pali Society, 1913.
- Suvarṇaprabhāsottamasūtra*. Ed. Johannes Nobel, Leipzig: Otto Harrassowitz, 1937.
- Vimalakīrtinirdeśa*. Ed. Study Group on Buddhist Sanskrit Literature the Institute for Comprehensive Studies of Buddhism, Taisho University, Taisho University press, 2006.

## 【二次資料】

- Lamotte, Étienne [1966-1980] : *Le traité de la grande vertu de sagesse. De Nāgārjuna (Mahāprajñāpāramitāsāstra)* (=Bibliothèque du Muséion, vol. 18), 5 vols. Louvain: Institut Orientaliste.
- Nobel, Johannes [1958] : *Suvarṇaprabhāsottamasūtra*. Leiden: J. Brill.
- Radloff, Wilhelm [1930] : *Suvarṇaprabhāsa*. Leningrad: Russian Academy of Sciences.
- Tsukamoto, Keishō [2004] : *The Cycle of the formation of the schismatic doctrines*. Tokyo: Numata Center for Buddhist Translation and Research, pp. 79-137.
- 荒牧典俊 [1974] : 『十地経』東京: 中央公論社.
- 岩本裕 [1975] : 『大乘経典 (二)』東京: 読売新聞社.
- ウルジーヤルガル [2014a] : 『『金光明経』における空性について』(『印度学仏教学研究』, 第62卷第2号, pp. 159-162).
- [2014b] : 『『金光明経』第五章「空性章」訳注』(『東洋学研究』, 第51号, pp. 84-95).
- 梶山雄一・赤松明彦 [1989] : 『大智度論』東京: 中央公論社.
- 片山一良 [2001] : 『中部 (マッジマニカーヤ) 後分五十経篇 I』東京: 大蔵出版.
- 桂紹隆 [2012] : 「唯識と瑜伽行」(高崎直道監修 『唯識と瑜伽行』シリーズ大乘仏教7 東京: 春秋社, pp. 3-18).
- 雲井昭善 [1955] : 「原始仏教用語としてのamata (amṛta) の概念について」(『印度学仏教学研究』, 第3巻第2号, pp. 75-79).
- 斎藤明 [1998] : 「空と言葉」(『宗教研究』, 316号, pp. 27-52).
- 高橋尚夫・西野翠 [2011] : 『梵文和訳 維摩経』東京: 春秋社.
- 中村元 [1978] : 『ブツダの真理のことは 感興のことは』東京: 岩波書店. (第35刷: 1996).
- 長尾雅人 [1976] : 「中辺分別論」(『世親論書』東京: 中央公論社, pp. 227-372).
- 羽矢辰夫 [1992] : 「空と無我」(『印度学仏教学研究』, 第40巻第2号, pp. 12-16).
- 藤田宏達 [1982] : 「原始仏教における空」(『仏教思想7 空 (下)』京都: 平楽寺書店, pp. 415-479).

- 古坂紘一 [2003] : 「『金光明最勝王經』 重顕空性品に見る空性論と実践論」 (『密教文化』, 第221号, pp. 1-35).
- 壬生台舜 [1987] : 『金光明經』 東京: 大蔵出版.
- 森章司 [2001] : 『仏教的ものの見方—仏教の原点を探る—』 東京: 国書刊行会.
- 渡辺章悟 [1996] : 「プラジュニャー (prajñā) 再考」 (『東洋学論叢』, XXI, pp. 76-90).
- [2009a] : 『般若心經—テキスト・思想・文化』 東京: 大法輪閣.
- [2009b] : 『金剛般若經の研究』 東京: 山喜房佛書林.
- [2009c] : 『金剛般若經の梵語資料集成』 東京: 山喜房佛書林.
- [2013a] : 「『金剛般若經』 の「即非の論理」」 (『松ヶ丘文庫研究年報』, 第27号, pp. 43-53).
- [2013b] : 「般若經の形成と展開」 (高崎直道監修 『智慧／世界／ことば—大乘仏典I』 シリーズ大乘仏教4, 東京: 春秋社, pp. 101-153).

## On the Śūnyatā Chapter of the *Suvarṇaprabhāsa*

Ulziijargal

The Śūnyatā chapter of the *Suvarṇaprabhāsa*, comprised of thirty-three stanzas, is devoted to expounding the doctrine of *śūnyatā* or “emptiness.” Although a large number of studies have been done on this chapter, no study has attempted to examine the relationship between the doctrine of emptiness in the chapter in question and that expounded in the early and Mahāyāna Buddhist texts. This paper aims at this attempt.

A closer investigation of the Sanskrit text of the Śūnyatā chapter reveals the following:

(1) The Śūnyatā chapter elucidates the nature of *aṣṭādaśa dhātavaḥ* or “the Eighteen Elements,” of *caturmahābhūta* or “the Four Great Elements,” and of *dvādaśa pratītyasamutpāda* or “the Twelve Dependent Originations” on the basis of the doctrine of *anātma* or “selflessness,” of *anitya* or “non-eternity,” and of *duḥkha* or “suffering,” respectively. It is worth noting that the idea that all phenomena are selfless, non-eternal, and cause suffering can be traced back to early Buddhist canon. This would suggest that, concerning its fundamental thoughts, the *Suvarṇaprabhāsa* shares several features with early Buddhism.

(2) The compiler(s) of the *Suvarṇaprabhāsa* incorporate(s) into the Śūnyatā chapter not only the logic of “identity as difference” as applied in the *Vajracchedikā Prajñāpāramitā*, but also terms such as *vikalpa* or “false discrimination” found in Maitreya’s *Madhyāntavibhāga*, both of which are peculiar to Mahāyāna Buddhist texts that expounds the doctrine of emptiness. It should be also noted that *prajñā* or “wisdom,” which enables one to understand the doctrine of emptiness, is regarded as the same as that which leads one to emancipation from rebirth.